

I 次の文章を読んで、後の問い（問1～10）に答えよ。（配点 75/100）

なにが不法というて、寝ころぶ姿勢ほど不法なものはない。みつともない姿勢である。——と私たちは思っている。しかし、どうしてみつともないのか、不法なのか。そもそもこれを不法と申しだしたいわれはどこにあるのか。などと考えると、^Aはつきりした答えは得られない。

隠遁的なある作家の話である。名をあげないのは、いわば伝聞であって、確かな話でないからだ。が、私には妙にこの話が印象的であった。この作家は、座ぶとん一枚ぶんぐらいをつないだ長座ぶとんを用意しており、来客があると、それを人にすすめ、自分もその場に寝そべるのだという。安楽、というてこれほど安楽な姿勢はない。そして、「安楽」というのが、客人にたいする最高のもてなしだとこの人は考えている。

たしかに四角四面の応接セットに「さあ、どうぞ」などとすすめられても、**I**「安楽」をごちそうになったことにはならない。白いカバーなどが大事そうにかかっていたりすると、妙に気づまりになることもある。**II**長座ぶとんが最高のちそうか、と私は妙なことに感心してしまった。もつともこれは座ぶとんでなく「ころびぶとん」と呼ぶべきかもしれないが。

ところで近ごろ、司馬遼太郎氏の『歲月』という小説をよんでいて、次の個所に目がとまった。

「西郷はだまって板垣を奥の座敷に招き入れた。『そこへ寝ころびなされ。——私も』と、西郷は体をねじらせて両手をつき、長くのびようとした。^a薩摩では親密な客に対するタイグウとして、枕をあたたかいに寝ころびながら話す風習があった」

西郷とはもちろん西郷隆盛のことである。この場はけつぎよく、板垣退助が「いや、そういう気にはなれない」ということで、寝ころび対談は成立しなかったことになっている。私は無知にして薩摩にこういう風習のあるのを知らなかった。もしこの通りだとすれば、さきの作家は、薩摩の伝統を今日に継いでいることになる。

もしかりに、これが小説らしい作りごとだとしても、日本人の情情的英雄である西郷が不法の極である寝ころびを客人にすすめたという構想^Bそのものがおもしろい（司馬氏に聞いたところでは、氏の母方の故郷、大和郡山にもこういう風習があったそうだ）。

私の好きなカクウ人物の一人に「物ぐさ太郎」がいる。腹がへつても目の前のモチを拾うのも面倒がったという人物だが、あの人物は、他人とものをいうとき、どういう姿勢をとっていたのであろうか。そんなことが気になる。仰向いていたのか、それとも片ひじついていたのか。

ゴロ寝ということばがある。そこから来たテレビ寝という新語もある。要するに、サラリーマンが日曜日に、畳の上にごろりと寝そべり、片ひじついてテレビなど見ている図である。金のない日本人の平均的安楽の図、といえよう。この場合も、仰向いては天井が見えるだけで、やはりテレビ寝にはなるまい。テレビ視聴という最低限の対社会的姿勢のためには、**III**片ひじつくりの努力は要るのである。

とはいっても、そういう努力が要るのはこれはテレビの方が悪いのではないか。正面から相手を見ずえるという間違った文化の延長線上にテレビがいるからではないのか。つまり、人間を正面

から見すえるように、テレビを正面から見すえることが当たり前と考えている習慣文化の方に問題がある。ここはテレビの方がゆずるべきである。もし人間の「ほんとうの」姿勢が寝ころぶ姿勢にありとすれば、テレビの方が、寝ころんで見られる形になったほうがいい。なのに、どうも話が逆になっているような気がする。

甲

——といったことは抽象論としてはよく言うけれど、しかし実際の話になると、テレビとはああいうもので、したがって人間はテレビの「姿勢」に順応するのが当然、といったことになってしまう。

そういえば、昔の人は絵巻物や冊子^{ちし}をどういう姿勢で見たり読んだりしていたのだろうか。そんなことが気になってくる。絵巻物は机の上にのせ、左手で開き右手で巻きながら見ていった——というのが定説だったようだが、最近、田村悦子氏の綿密なコウシヨウ研究（『こわたの時雨』について『美術研究』昭和四十六年七月）が出て、これがくつがえされてしまった。氏の説をかんたんに言ってしまうと、たとえば女房たちが絵巻物を見たのは、腹ばいの姿勢だったのである。絵巻物はとうぜん畳の上にひろげられている。それをまた他の人たちが覗き見している。そういう例がいくつかの絵にあるし、『こわたの時雨』にはこの姿勢の描写文章すらある。仏書を学ぶといったばあいには、机の上にこれをひらき、うやうやしく学ぶという姿勢がとられてきたけれど、これと絵巻物や冊子のばあいには話がちがうのである。

ところが今、私たちは本を読むといえ、当然机の上におしひろげるものとカンネンしている。錯覚である。私たちは何も二六時中、勉強にいそしんでいるわけではないのである。とくに本の物神性のうすれてしまった今日、本は机の上で、というのは笑うべき錯覚である。げんに作家の中にも、執筆ですら、寝床の中で腹ばいにならなければ書けないという人もいるではないか。

といったことを考えあわせてくると、寝ころぶことについての禁忌は、ごく新しい、それも一部のまじめな人たちの笑うべき風習がしだいに一般にひろがっていった、そのせいだと思わずにいられない。

人間はどのような姿勢のときいちばん安楽なのか。それを追究した人に設計家の佐藤明氏がいる。彼は次のようにシサクを進める。「何をやろうとしているのか——椅子を考えている。何のためのか——住宅の居間。居間とは何か——家族がくつろいで団樂^{だんらく}する場所。くつろぐことと椅子との関係は——安楽であること。安楽な姿勢とは——ここまできて少しつかれを感じたので、今まであぐらをかいていたのをやめ、足を前に投げ出した。それもしばらくするとおかしくなつて、今度は横ずわりをし、しまいにはタタミにねそべってしまった」（『家づくり入門』）

けつきよく佐藤氏は人間には安楽な姿勢というものはないのだと発見する。そこからどんな^{かたがう}嗜好でもできる新しい椅子の考案へと進むのだが、私にとって興味のあるのは、実験家佐藤氏が「しまいにはタタミにねそべってしまった」という事実である。

昔から、寝るが極楽、起きて働くばかりがいるなどという。しかしまた「**乙**」という表現もある。寝ころんだ姿勢はいちばん安楽なのは事実だが、次の動作に移りにくい、いちばん無警戒の姿勢であることもたしかである。物ぐさ太郎ほどにも度胸がすわつてしまえば、寝そべったまま一生くらすこともできようが、ふつうの人には、そこまでのふんぎりはつかない。寝ころぶかどうかは、実は、対社会的警戒態勢にはいるかどうかの**Ⅳ**なのである。だからこ

そ、西郷隆盛は、腹をわつて話すときには共に寝ころんで話したのであらう。

寝ころぶ、ということで私は三つの場合、状況を思いうかべる。

一つは、唐突なようだが、ケンカした犬の場合である。疑似ケンカをして負けた犬は仰向けにひっくりかえり、首をさしたす。降伏のしるしである。素っ首をさしたすのは武装解除のしるしである。^(注1)ころびバテレンの「ころび」はあんがいこの降伏のイメージとつながっているのかもしれない。

二つ目は、^(注2)ゼツタイゼツメイになった三下奴が「さあ、殺せ」とわめいてひっくりかえる場合である。^(注2)いがみの権太のように自暴自棄的「寝ころび」がかえって威嚇になるという文脈だ。自殺者の心理のあるものは、これに近い。

三つ目はもつとも平凡なゴロ寝、テレ寝である。現代アメリカにはスインガーという連中がいる。屋は四角四面なスクエア（まじめ人間）として働き、夜はヒップに早変わりというのをスインガーと称するらしいが、現代日本サラリーマンは、自宅にかえると大半がゴロ寝という名のヒップに早変わりする。昼間、係長の「椅子」だの、課長の「椅子」だの、非安楽椅子に無理にしばられているあまり、夜になると、長々と寝そべるというダイシヨウ作用に彼らは移るのであらうか。

この三つの姿勢とも、西郷隆盛の「寝ころび」ほどは自由でないこと、言うまでもない。ところで物ぐさ太郎と西郷隆盛という二つの「理想的」姿勢を比較すればどうということになるか。これは実は二つではない。共に、**V** と **VI** という対極的形態が一つに融合した私たちの理想像なのである。西郷のふしぎな人気は、彼が寝ころぶ人間だった点にかかっていると思えるのだ。

(多田道太郎『しぐさの日本文化』、講談社、2014年)

(注1) ころびバテレン：江戸幕府の禁教令によつてキリスト教から改宗した宗教指導者のことを指す。

(注2) いがみの権太：浄瑠璃『義経千本桜』に登場する無法者。

問 1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはっきりした楷書体で書くこと。解答番号は 1 と 7。

a タイグウ

1

b カクウ

2

c コウシヨウ

3

d カンネン

4

e シサク

5

f ゼツタイゼツメイ

6

g ダイシヨウ

7

問 2 空欄 I と III に入る語として最も適当なものを、次の①～⑨のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同一番号は一度しか使えない。空欄 I の解答番号は 8、空欄 II の解答番号は 9、空欄 III の解答番号は 10。なお、完答しなければ加点しない。

- | | | | | |
|--------|--------|--------|-------|-------|
| ① あたかも | ② さらに | ③ たいして | ④ しかも | ⑤ せめて |
| ⑥ なぜなら | ⑦ その上に | ⑧ なるほど | ⑨ もし | |

問 3 空欄 IV に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- | | | |
|-------|--------|--------|
| ① 着地点 | ② 立ち位置 | ③ 分かれ目 |
| ④ 静止点 | ⑤ 延長線上 | ⑥ 到達点 |

問 4 空欄 V と VI に入る語として最も適当なものを、次の①～⑨のうちから一つずつ選べ。空欄 V の解答番号は 12、空欄 VI の解答番号は 13。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ① 英雄 | ② 無為 | ③ 習性 | ④ 栄華 | ⑤ 享楽 |
| ⑥ 墮落 | ⑦ 活躍 | ⑧ 面倒 | ⑨ 慣性 | |

問 5 空欄 甲 に入る文として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 14。

- ① 人間は機械と対立するのではなく、機械と共存すべきである
- ② 人間は機械に利用されるのではなく、機械を改良すべきである
- ③ 人間は機械に育てられるのではなく、機械を育てていくべきである
- ④ 人間は機械に合わせるのではなく、機械の可能性を探るべきである
- ⑤ 人間は機械と競い合うのではなく、機械を競い合わせるべきである
- ⑥ 人間は機械に使われるのではなく、機械を使うべきである

問 6 空欄 乙 に入る語句として最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 寢た子を起こす
- ② 寢耳に水
- ③ 惰眠をむさぼる
- ④ 寝る子は育つ
- ⑤ 春眠暁を覚えず
- ⑥ 寢首をかかれる
- ⑦ 果報は寝て待て
- ⑧ 起きて半畳寝て一畳

問 7 傍線部 A 「はつきりした答えは得られない」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 16 。

- ① 寝ころぶ姿勢が不作法かつみつともないとする考え方がある一方で、客人に対する最高のもてなしとする考え方もあることを踏まえると、寝ころぶ姿勢の良し悪し^あについて説明することは難しいということ。
- ② 寝ころぶ姿勢が不作法かつみつともないといわれることが、江戸時代にどのように捉えられていたか、また現在どのように捉えられているかを考えると、寝ころぶ姿勢に対して評価できないということ。
- ③ 寝ころぶ姿勢は不作法かつみつともない一方で、社会に対する無警戒や人に対する親密さを示すために今でも様々な場面で利用されていることを考えると、寝ころぶ姿勢に対して評価を下すのは時期尚早であるということ。
- ④ 寝ころぶ姿勢は不作法かつみつともないと一般的にいわれるが、かつて西日本全般で寝ころびが安楽な姿勢であるとともに客人への最高のもてなしとされていたことを踏まえると、寝ころぶ姿勢の良し悪しは個人の常識に委ねられているということ。
- ⑤ 寝ころぶ姿勢は不作法かつみつともないものとされているが、地域によっては客人に対する最高のもてなしとなることもあり、寝ころぶ姿勢に対して共通した認識を持つ必要があるということ。
- ⑥ 寝ころぶ姿勢は不作法かつみつともないといわれるものの、寝ころびながら生活した「物ぐさ太郎」が実在していたことを踏まえれば、必ずしも寝ころぶことが悪いといえず、そのために明確な答えを出せないということ。

問 8 傍線部 B「構想そのものがおもしろい」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 17。

- ① 寝ころびが無警戒を示すものであることを西郷隆盛は意識していなかったにもかかわらず、その効果を認識し政府要人との会談を実現させていたから。
- ② 寝ころびが無警戒かつ不作法な姿勢であることを熟知し、利用していたのが意外にも日本人に英雄視されていた西郷隆盛であったから。
- ③ 寝ころびが警戒を示す姿勢であるにもかかわらず、日本人に英雄視された西郷隆盛がそれを逆手にとって、政府要人との会談に利用していたことがわかっているから。
- ④ 寝ころびが警戒を示していない姿勢であることを小説に取り入れることによって、寝ころびが会談に有効であるという意外性を示しているから。
- ⑤ 寝ころびが無警戒かつ不作法な姿勢とされているにもかかわらず、日本人に英雄視されている西郷隆盛にそのような態度を取らせているから。
- ⑥ 寝ころびが無警戒を示す姿勢であるからといって、実際にその姿勢でお客様に対応するのは日本においては不作法であり、それを利用した小説が興味深いから。

問 9 傍線部 C「錯覚である」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 本を机の上で読まなければならないというのは、歴史的な状況に鑑みても当てはまるというわけではなく、学校教育でそのように指導されたことが正しいと思い込んでいるだけだから。
- ② 人間の取る姿勢でもっとも安楽なものは寝ころびであるが、この姿勢が読書をするときにもっともよいことを設計家の佐藤明氏が主張しているから。
- ③ 本は机の上で開くというのが一般常識であるが、電車内・公園などで読書していることも考えると、この一般常識は現代人だけの思い込みであることが分かるから。
- ④ 歴史的な経緯からすると読書時に机を利用する必要性はなく、机に向かう姿勢でなければならないというのは、一部の人たちによる慣習が広まっただけと考えられるから。
- ⑤ 私たちが机の上でだけ読書をしなければならないというのは、ごく一部の真面目な近現代の人たちの中で言い慣わされていたことが広まったと考えられているから。
- ⑥ 本を机の上で開くというのは、かつて仏書をうやうやしく学んだ歴史に影響を受けた最近の人たちが、広めただけであるから。

問10 本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ選べ。ただし、定答しなければ加
点しない。解答は解答番号 19 の二ヶ所にマークすること。

- ① 筆者は寝ころぶ姿勢を不作法なものとし、またみっともない姿勢であると言い切るが、ある作家の体験談や司馬遼太郎の作品などから、寝ころぶ姿勢に対する考え方を転換させている。
- ② 一般的に寝ころぶ姿勢は不作法なものであるとされているが、日本ではかつて「安楽」な姿勢として客人に勧める風習があったことをふまえると、かならずしもみっともない不作法なものであるとはいえない。
- ③ サラリーマンが日曜日に、片ひじついで寝ながらテレビを見ているというのは日本人の平均的安楽の図であるが、平安時代の女房たちは姿勢にこだわることなく絵巻物・仏書などを読んでいたことが明らかになっている。
- ④ テレビを寝ころびながら見る習慣文化が日本人にはあるが、テレビそのものを寝ころんで見られる形に改良するという問題については、テレビの形に対応した姿勢で見ることが当たり前になっていたのも、誰もが考えてこなかったことである。
- ⑤ 安楽な姿勢を追求した設計家佐藤明氏が座り心地のよい椅子を考案している最中に「寝ころんだ」という事実は、寝ころぶことが人間にとって考える上での最も合理的な姿勢であることを示している。
- ⑥ 寝ころぶ姿勢は人間がとる姿勢の中でいちばん楽なものであると同時に、社会に対して無警戒な姿勢であるので、西郷隆盛は気の置けない人物が来訪した時にその姿勢を勧めることで親密さを示していた。
- ⑦ アメリカでは、昼は真面目な態度で働き、夜になると容姿が様変わりをするスインガーと呼ばれる人がかつていたが、これは現代日本サラリーマンが昼は真面目に働いていても帰宅するとゴロ寝という名のヒップに早変わりするのと同じである。
- ⑧ 日本で西郷隆盛に人気があるのは、無警戒な姿勢を取ることができるほどの度胸をもった人物であると同時に、来客者に対して気配りのできる人物であったことが日本人の心情に合致したからといえる。

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問い（問１～９）に答えよ。（配点 75／150）

近代医学の発展

近代以前の医療と宗教について考えると、それらは思いの外に重なり合っていたことがわかる。それらはどちらも広い意味での「癒し」ということにかかわる仕事であり、古い時代ほど、むしろ宗教が医療の領域をカバーしていた。人間を癒す不思議な力は、何らかの超越的な存在から来るものと考えられ、それは明らかに宗教的な事柄であった。

そのような状況のなかで、医学がはつきりと宗教から独立したものとして認められるようになったのは、西洋近代においてである。これが成立する基礎には、心と体を明確に切り離して考え、人間の身体を客観的な研究対象としてみるという **ア** が存在している。この方法の確立によって、医学は近代科学として急激に発展する。それまでは、まじないや祈りや、宗教的色彩の濃い「薬」などによって病気に対抗し、その効率は極めて悪かったのに対して、近代医学は効果の明瞭な方法や薬を用いて成果をあげていった。

ペストに対して護符を用いたり、お祈りをしたりしても、その力に対抗するのは難しかったが、近代医学はペストをクジヨ^aしてしまった。近代医学のおかげで、以前なら多くの人の命を奪った病気を予防したり、そこから治癒することができるようになった。それは、 **イ**、神や仏よりもよほど頼り甲斐^がのあるものなのである。

近代医学の発展により、人間は神仏抜きで幸福な生活ができるようになっただろうか。なかなか簡単にそうならないところが人間というものの特徴である。

近代科学は既に述べたように、心と体を明確に切断し、また現象を観察する者と観察される対象とに明確に切断する。この方法によって、観察された現象に関する **イ** な法則を見出し、それを利用して対象を自分の望むように操作することができる。そして、その結果が非常によく信頼できるので、近代人は科学の進歩によって人間の望みがすべて解決されたり、人間の悩みがどんどん減少していったりと誤解するようになった。

しかし、現状を見ると事態はそうなっていない。科学の進歩によって、人間の悩みはますます多く、深くなっていると言ええる。医療の領域にのみ限ってみても、問題はいくらかでもある。平均寿命が長くなるのはよいが、多くの老人がいかに生きるか、そして、いかに死ぬかの問題に悩んでいる。近代医学は人間を延命させることに力を発揮するが、延命された老人がいかに生きるかとか、人間が死期を告げられたときそれをどう受けとめるか、いかに死ぬかなどの問題に対しては無力なのである。

これは当然である。近代科学は「私」という存在と現象を切り離して研究してきたのだが、前述した問題はすべて「私」という一人称にとつての問題である。何もできなくなった「私」は生きていいのか。「私の死とは何か」などのことは、近代科学の対象外のことである。しかし、これらのことを不問にして「医療」は成立するだろうか。

甲

この世界を自分から切り離して研究することを近代科学が行ってきたが、人間はこの世界を自分

との関係において見ることに、そして、それをある程度まとめたものとして自分の世界観、人生観としてもつことも必要である。「死について」研究するのではなく、「私の死」を意味あるものになくしてはならない。自分にとっての世界を考えると、それを何らかの超越的存在との関係において考えようとする、それは宗教になる。

その超越的存在をどう解釈するかによって異なる宗教や宗派ができる。それがどのようなものであれ、人類は何らかの宗教をもつて生きてきた。この世における現象をすべて超越的存在によって説明し、それと自分との関係が**カッゴ**としている限り、人間は安らかに生きていける。しかし、人間はそのままの状態では満足できず、ヨーロッパの歴史を見ると特に明らかなように、できるだけ超越的存在に頼らず、自分の力で自分の欲望を満たそうとする方向をとってきた。そして、これまで宗教の領域と思われてきたところを、科学技術が受けもつようになり、宗教など不要とさえ思うようになった。

しかし、科学が切断了「関係」をいかにして回復するかという問題が残され、それは医療と深刻にかかわってくるようになった。そのひとつとして、心身症の増加がある。つまり、これは心と体の切断を前提とする医学が病気をだんだんとこの領域に追い込んでいったと言いたいほどに、最近になって増えてきて、これに対する治療もなかなか困難である。**乙** によつては、心身症にアプローチするのは極めて難しい。

心身症の治療は今後の大変重要な課題となると思うが、その治療においては、治療する者とされる者との「人間関係」の在り方が非常に大切となってくるであろう。しかし、そもそも近代医学はそのような関係を切ることを前提にして成立しているものである。このジレンマをどのように**コク**フクすべきであろうか。

医学の発展によって、身体や病気に関する知識が増え、検査の方法も**セイミツ**になったので、患者の病気によって、その死期を大体予想できるようになった。**癌**で、後三か月ほどの命であることを患者に告げる。このことは医学的に可能である。しかし、それをその患者がどう受けとめるかについては医学は無関係である。近代医学の性格からして、そんなことは関係のないことだから、告知だけして後は宗教家にまかせることにする、というのもひとつの考えである。

しかし、その患者に対して医療関係者は常に接していかなければならない。われわれは「無関係です」と言つて接することが、医療に携わる者として当然のことと考えられるだろうか。

死期が明確でなくとも、高齢者の扱いはどうなるのだろうか。**痴呆**がひどくなつて、家庭で面倒がみられないので入院してくる高齢者の数は、だんだんと増加している。その人たちを病院において「あずかる」ことは何を意味しているだろうか。病院は高齢者の「身体」をあずかっているのだろうか。

近代医学は神仏も手を焼いたペストの患者を、その力によって「癒す」ことができた。一般の人たちの医学に「癒し」を期待する力は太となり、医学もまたそれに応え得ること——神仏よりはるかに頼り甲斐のあること——を強調してきたような感もある。その延長として、高齢者が「入院」してきたとき、そこに何らかの「癒し」を期待するとしても、それはむしろ当然のことではなからうか。

現代の医療

このような問題を解決するために、^A近代医学と医療との区別をはつきりと自覚することが必要と、
筆者は考えている。医療は近代医学をソナチョウしているが、そのみによつて行えないことを認識すべきではないだろうか。医療の現場においては、人体ではなく人間を相手にしなくてはならない。人間を相手にする限り、そこに人間関係ということが入つてきて、近代科学の方法論からはみ出してしまふのである。

ここで気をつけねばならないのは、近代医学の手法によるのみでは手の届かない医療の領域において、いわゆる「宗教」がイリヨクを揮うということである。それは「すればよくなる」という近代科学の形に頼り、本来の宗教性から逸脱した方法をもつて「癒し」を行おうとする。しかも、^B問題をもつひとつの厄介にするのは、それが「効果」を発揮することもあるという事実である。そのことにその「宗教」の正しいことが立証された、と考える人もある。それに対して、近代科学主義者が「ウ」であるから間違いであると言つてみても、それは「効果」をあげているので何とも迫力がない。

このような領域にかかわつてくる限り、われわれは何をもつて「科学」と呼び「宗教」と呼んでいるのか、正しい、正しくないという判断をいかにして下すのかなどについて、^C相当に詳細な議論をしなくてはならないであろう。筆者は近代科学とは異なり、観察者と現象との関係の存在を前提とする「科学」を考えざるを得ないと思つている。医療はそのような新しい科学の領域を拓く「医療学」として発展すべきである。Ⅱ、それは近代医学を否定するものでも、敵対するものでもない。

このような「新しい科学」の領域は、宗教と重なり合う部分が多いことも認めねばならない。ここでは近代科学のパラダイムによつては了解できない現象に出会うことになるだろう。従つてこの領域は、これまで宗教にまかされていた。宗教はそのような現象を、何らかの絶対者との関連によるキョウギによつて説明してきた。人間の理性のみによつて説明することは不可能だからである。^h

しかし、ここで「新しい科学」として、これらの理性によつて説明できない現象も、あくまで対象外として排除することなく取り入れて研究する態度を棄てないならば、これまで「宗教」と「科学」として分離されていた両者の接点について、研究し実践することが可能となるのではなかろうか。

ここに述べたような研究にしろ実践にしろ、一人の人間が行ふことは、ほとんど不可能であろう。それを可能にするのは複数の人間によるチームワークであろう。医療の領域において、その研究や実践において、チームワークを行うこと、それに対して医学者が謙虚に参加することが望まれる。

(河合隼雄『これからの日本』、潮出版社、1999年)

問 1 傍線部 a ～ h のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつぎりした楷書体で書くこと。解答番号は 20 、 27 。

a クジヨ

20

b カツコ

21

c コクフク

22

d セイミツ

23

e 携

24

f ソンチヨウ

25

g イリヨク

26

h キョウギ

27

問 2 空欄 I ・ II に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。解答番号は 28 ・ 29 。

I

① あわよくば

② 案ずるに

③ 言うならば

④ 道ならぬ

⑤ ありとあらゆる

28

II

① もちろん

② なぜなら

③ いわゆる

④ あらかじめ

⑤ いつまでも

29

問 3 空欄 ア 、 ウ に入る語として最も適当なものを、次の各群のうちからそれぞれ一つずつ選べ。空欄アの解答番号は 30 、空欄イの解答番号は 31 、空欄ウの解答番号は 32 。

ア

① 一般論

② 原則論

③ 建前論

④ 科学論

⑤ 方法論

イ

① 効率的

② 普遍的

③ 神秘的

④ 主観的

⑤ 先進的

ウ

① 宗教

② 妄信

③ 偽物

④ 非科学的

⑤ 無根拠

問 4 空欄 乙 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 33。

- ① 科学を前提とした考え
- ② 心のこもらない考え
- ③ 心と体を切断した考え
- ④ 体を排除した考え
- ⑤ 病気を軽くみた考え

問 5 傍線部 A 「近代医学と医療との区別をはっきりと自覚することが必要」の理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① 近代医学の手法のみでは、治療する者とされる者との人間関係が抜け落ちてしまい、患者に病気を告知することしかできないため。
- ② 近代医学の手法のみでは、いわゆる「宗教」がイリヨクを揮い、その「宗教」が正しいことが立証されてしまうため。
- ③ 近代医学の手法のみでは、本来の宗教性から逸脱した方法をもって「癒し」を行おうとしてしまうため。
- ④ 近代医学の手法のみでは対応できない患者が増えてきており、患者の期待する「癒し」も含めたアプローチが医療に求められているため。
- ⑤ 近代医学と医療との区別が曖昧では、効果の上がりやすい宗教に対抗できないため。

問 6 傍線部 B 「問題をもつひとつ厄介にするのは、それが『効果』を発揮することもあるという事実である」の説明として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 宗教が、本来の宗教性から逸脱した方法をもって「癒し」を行った場合でも、「効果」が発揮されることがあるため、宗教が間違いだと言いにくい。
- ② 医療の現場においては、近代科学の手法のみでは手の届かない病があり、「宗教」によって効果を得られる場合がある。
- ③ 宗教と科学は全く重なり合わないのに、宗教が近代科学の手法に似せた形で「癒し」の効果をあげることがある。
- ④ 「宗教」によっても「効果」が出てしまうと、近代医学の手法がないがしろにされる可能性があり問題である。

問 7 傍線部C「詳細な議論」をすぎき理由として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 「宗教」が効果を上げているからといって、簡単に正しいと言ってしまうわけにはいかな
いということ。
- ② この世界を自分から切り離して研究するという、近代科学の前提が、現代の医療にはそぐ
わないということ。
- ③ 現代の医療に求められている人間関係が、近代科学の方法論からははみ出してしまうとい
うこと。
- ④ 本来「宗教」とは、超越的存在との関係において自分のことを考えるものであるが、そう
した宗教性から逸脱した方法をもって「癒し」を行おうとする「宗教」がイリヨクを揮って
いるということ。
- ⑤ 「科学」においては、観察者と現象との関係を切り離して研究することが求められており、
医療においてもそうした科学が求められているということ。

問 8 空欄 甲 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑤のうち
から一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 医療の切断した「関係」
- ② 関係性の回復
- ③ 「癒し」とは何か
- ④ 超越的存在と科学
- ⑤ 近代科学のジレンマ

問 9 本文の内容に合致するものを、次の①～⑧のうちから二つ選べ。ただし、完答しなければ加算しない。解答は解答番号 38 の二ヶ所にマークすること。

- ① 科学の発達した現代においては、これまで宗教の領域と思われてきたところを科学の力で担うことができるため、宗教は不要となりつつある。
- ② 患者が病気をどのように受け止めるかについて、医学は無関係であるから、告知だけしてあとは宗教家に任せるのが妥当である。
- ③ 近代科学の手法では、現代の医療に求められている「人間関係」が抜け落ちてしまうため、観察者と現象との関係の存在を前提とした新しい「科学」を考えていく必要がある。
- ④ 医療の現場においては、人体ではなく人間を相手にするべきであり、例えば痴呆のひどくなった高齢者が入院してきたとき、単に「身体」をあずかるのみでなく「癒す」ことまで考えるべきである。
- ⑤ 医療は近代医学のみによつては行えないのであり、「効果」が発揮される宗教による癒しも利用しながら患者の治療にあたるという方法を、考慮に含める必要がある。
- ⑥ 神仏よりもよほど頼り甲斐のある近代医学は、現代において効果の明瞭な方法や薬を用いて効果をあげており、人々は神仏抜きでも幸福な生活を送れるようになった。
- ⑦ 現在では、科学の進歩によって人間の悩みが逆に多くなっている面があり、人間の延命に貢献してきた近代医学は治療の領域では無力になっている。
- ⑧ 医療の領域においては、科学者たる医者と宗教家とがチームワークで治療に当たるべきであり、そのためにも近代医学はいったん否定される必要がある。